

コリント人への手紙第一

パウロがよく知っている教会に宛てた手紙でした

古代のコリントは大きな港町で

ギリシャやローマの神々の神殿がたくさんあり経済の中心地でもあったので

パウロは戦略的に選んでこの街に宣教師として来ました

彼はここで1年半を過ごし知り合った人々にイエスを伝えました

その結果多くの人々がイエスを信じ教会を形成したのです

そのことについては使徒の働き 18章に記してあります

その後パウロがほかの街で教会を始めるためにコリントを去ると

コリントの教会では問題が起きているという報告を受けるようになりました

それに心を痛めたパウロはコリント教会に宛てたこの手紙を書きました

この手紙は5つの主要なセクションと最後の挨拶で構成されています

それぞれのセクションで

パウロは起きている問題の一つひとつに言及しています

その意味でこの手紙は5つのトピックを集めた短い文章の

寄せ集めのようなものでありながらそのすべてをつなぐ考えも含まれています

すべてのセクションでパウロが繰り返すパターンがあります

まず問題の内容を挙げそれに対して福音のストーリー

つまりイエスに関する良い知らせこれのある側面をもって答えます

そのうえでコリントの人々が信じていると言っている内容の通りに

生きていないと指摘するのです

ですからこの手紙は生活におけるすべてを

福音というレンズを通して見直すレッスンになっているのです

ではその詳細を見ていきましょう

1章から4章で取り上げられている問題は

教会に分裂があるということです

パウロがコリントを去ったあと

まずはアポロ次にペテロといった別の教師たちが教会にやってきました

すると信徒たちはそれぞれお気に入りの教師を選んで取り巻きになり

他の教師を選んだグループを悪く言ったり

さげすんだりするようになったのです

これに対してパウロは辛辣な言葉でこう応じています

冗談じゃない教会は人気投票をする場ではない

教会とはイエスを中心とする共同体で

指導者も教師も単なるイエスのしもべだ

ある教師をほかの教師より気に入ったからといって

それは分裂する理由にはならないし
お互いに悪口を言い合う理由にもならない
教会の中心はイエスであり彼がしてくださったことの良い知らせだ
5章から7章では
パウロは性的な問題を指摘しています
教会の中であらゆる人と性的な関係を持つ人がいて
中には義理の母と関係をもっている人や
未だにギリシャの神をまつる神殿で礼拝をし
そこで働く娼婦と関係を持つ人たちもいました
そればかりか教会の中にはそういったことは
まったく問題ないと言う人たちがいたのです
我々はキリストにあって自由だ神の恵みに限界はないんだ
だから大丈夫というわけです
しかしパウロは問題だと反論しました
そして福音を説き明かしながら
その考えがいかにも間違っているかを示しこう言いました
まずはじめに不品行のせいで人間関係を壊す
あなたの罪のためにイエスが死なれたことを思い出しなさい
だからクリスチャンにとって性的にきよくあるということは
イエスの愛と恵みに対する重要な応答なのだ
パウロはまたイエスの肉体がよみがえられたからこそ
私たちの肉体もよみがえるという事実をあげ
あなたの体がイエスによって今も未来も
贖われているならあなたの体に関することは
非常に重要な事柄なのだと言いました
だから自分の好きなようにしていいわけではないのです
パウロの論点は明快でした
イエスに従う者にとって
性的な清さにおける妥協の余地はないのです
8章から10章では
食物たべものに関する問題が取り上げられています
といってもある食物を好きか嫌いかというような話ではありません
コリントの教会を分裂させていた問題とは
ギリシャやローマの神々にささげられた動物の肉についてだったのです
このことに対する反応の違いが
ユダヤ人と非ユダヤ人を分裂させていました

ここでもパウロは福音から根本的なメッセージを説いています
クリスチャンの忠誠心は
ただ主イエスにのみ向けられるべきでほかの神々ではありません
ですからほかの神々に奉げられた肉があつて
もしそれを食べたならばクリスチャンはイエスだけでなく
ほかの神々も礼拝するんだと言われそうな場では
その肉を食べるべきではないとパウロは言います
クリスチャンはイエスに誠実であるべきです
他人を自分以上に愛して誤解させないように配慮すべきだからです
しかしパウロはこう付け加えてもいます
クリスチャンは神が創造者でその動物も神が造ったものだと信じている
そして偶像は単なる木や石の切れ端に過ぎない
だからもし誤解しそうな人が周りにいなくて
お腹がすいているならばその肉を食べればいい
キリストにあつて新しい人間であるクリスチャンは自由なのだから
そういった事柄には自分の良心に従って行動すればいい
つまりある時は食べてよくてある時はいけないと判断する
根本的な基準は愛なのです
愛は自分を否定し他の人の益となることを追求します
そして神の愛こそ良い知らせの核心なのです
イエスが私たちのために死んだのは愛のゆえです
だからクリスチャンはほかの人に対して
同じようにするべきだとパウロは言っています
11章から14章では
パウロは信徒たちが毎週行う礼拝について言及しています
信徒たちの中にはパワフルな霊的体験をした人たちがいて
彼らは声を出して異言で祈りました
またある人が神から示された言葉や教えについて話していると
別の人それがそれを遮って自分が教えられたことを話し始めることもありました
それは教会を混乱させ人々特に福音を聞くために
初めて教会に来た人たちの気を散らせることでした
この問題に対しパウロはこの集会を持つ意味と
そこではどんな態度が適切かを教えようとしています
教会とはそこに集う一人ひとりを通して神の霊が働く場であり
それは一致の中で起こるのです
それを教えるため

パウロは教会を人間の体に例えるという秀逸な比喻を用います
体は一つですがそこにはたくさんの違った部分があり
それぞれに重要な役割があるというわけです
パウロは聖霊が人々を通して行うあらゆる働きを挙げていきます
それはすべて教会を建て上げるためのものであり
これがこのセクションのキーフレーズになっています
パウロは教会の中で最も重要なのは神の愛であり
それは福音の中心的な概念であると結論します
愛もまたこのセクションにおけるキーワードです
愛があるなら自分の役割を使い
人に仕え人の益となる事をしたという思いになります
パウロはこれをコリント教会の問題にあてはめていきました
ある人々は教会に集う目的を強烈な霊的体験をするためだと思っていたし
別の人々は自分の考えを発表するためだと思っていました
しかしパウロはこう言いました
私も力強い祈りは大好きだがもしそれがほかの人の気を散らしたり
怖がらせたりするならそういう祈り方はやめるべきだ
それは人よりも自分を大事にしていることになるから
イエスを中心とした集まりには秩序があるべきで全員が学び
賛美し礼拝し神から語られることのできる場でなければならないのです
パウロが取り上げた最後の問題
はイエスの復活とイエスの信徒たちに与えられた希望についてです
教会の中には復活を信じるなんてばかげていて
クリスチャンにとっては大した問題ではないと言う人々がいました
パウロはこれを大問題として捉え反論します
復活は福音にとって必要不可欠だ
イエスがローマによって公開処刑されたあとに
肉体をもってよみがえった姿を何百人もが目撃しているから信じているのだ
もしイエスがよみがえらなかつたならその死は無意味で
私たちは今でも自分の罪と自己中心の中にとらわれているし
クリスチャンでいる意味はない
次にパウロはその復活は死と罪に対するイエスの勝利であり
私たちにとって命と力の源であり
全世界の希望についての約束であることを詳細に語ります
この復活の希望こそ
私たちがイエスにあって一致する理由であり

性的にきよく生きる動機であり
他たの人を自分以上に愛するための力の源であり
究極的には死に対する勝利の希望なのです
だから私たちはイエスが死からよみがえったことを信じている
とパウロは言います
それは福音は単なる道徳的な助言や
靈的な生活を送る秘訣ではないことを意味しています
むしろ福音とは
新しい現実を生み出すイエスについての良い知らせなのです
生活におけるすべてを福音というレンズを通して見る事
これがコリント人への手紙第一

【要約】

パウロの手紙は古代のコリントに送られ、その教会に宛てられたもので、コリントは大きな港町で、多くの神殿と経済の中心地であった。パウロはこの街に宣教師として派遣され、1年半を過ごし、多くの人々にイエスを伝え、教会を形成した。しかし、彼が他の街に教会を設立するために去った後、コリントの教会で問題が発生し、パウロは手紙を書いて対応した。この手紙は5つの主要なセクションで構成され、各セクションで異なる問題に言及し、全てを福音の視点から再評価するレッスンを提供している。問題に対するパウロのアプローチは一貫しており、まず問題を提示し、それに福音のストーリーを結びつけ、その後、信者たちの行動と一致しないことを指摘する。1章から4章では、教会の分裂が問題であり、異なる教師に忠誠心を示す信者たちが争いを引き起こしていた。5章から7章では、性的な問題が取り上げられ、信者たちの間で不倫や異教の神殿での性行為が起きていた。8章から10章では、神々に捧げられた肉の問題が扱われ、主イエスに忠実であるべきというポイントが強調された。11章から14章では、礼拝における秩序と愛について語られ、霊的な体験や異言の使用についての指導が提供された。最後に、復活の問題が取り上げられ、復活の希望がクリスチャンの信仰と生活において重要であることが強調された。この手紙は福音の観点からクリスチャンの生活を見直すための重要な教訓を提供している。